

Interview @ KIZUNA

留学生ラウンジ「きずな」の取り組みとして、本学留学生の日々の学生生活などについて取り上げるインタビューを2021年9月17日に実施しました。

今回インタビューを受けてくれたのは、経済学研究科の博士後期課程に在籍中の Eko Heru Prasetyo さんです。Eko Heru Prasetyo さんは、作成された動画「 Full-time father, full-time student 」が京都留学生 ショートムービーコンテスト 2020 (<https://www.studykyoto.jp/contest2020/>) で最優秀賞と観客賞を同時受賞されました。今回のインタビューでは動画で紹介されている彼の京都大学での経験に加え、様々な分野での成果を紹介しています。

インタビューの進行を担当したのは、留学生ラウンジ「きずな」でチューターを務める本学の学生の“たまみ”さんと“あやみ”さんの2名です。今回のインタビューは英語で行われました。

※今回の取り組みは、本学の新型コロナウイルス感染症対策に準じて行いました。

1. EKO HERU さんの出身地はどこですか。

私の故郷はパキスです。インドネシアの東ジャワ州にあるマランの小さな町です。

インドネシア人にとっては、山沿いの涼しい地域として知られています。

雨季と乾季がありますが、気温としては年間を通して25度前後です。

夏の暑さを比べると、京都は故郷の町より暑く、湿度も高くなります。

私は、高校卒業後に、ジョグジャカルタへ引っ越したのですが、ジョグジャカルタは文化と歴史に関して京都と似ていると思います。

2. EKO HERU さんはどんな研究をしていますか。

私は、経済学研究科博士課程の“英語で学位を取得するコース”に在籍しており、インドネシアのデジタル・ビジネスに関する企業について研究しています。

たとえば、バイク・タクシーは、インドネシアを含む東南アジア諸国の一般的な交通手段ですが、ここでもサービスのオンライン化が進んできています。

インドネシアでは、このように昔からある分野においても、企業はデジタル化することで顧客を引きつけ、獲得し続けています。

“英語で学位を取得するコース” (<https://u.kyoto-u.jp/-3md4>)



3. 日本に留学されたきっかけは何ですか。

ガジャ・マダ大学と京都大学の交換留学プログラムに参加することが日本留学への大きなきっかけとなりました。私はガジャ・マダ大学修士課程に在籍中の2015年12月から2016年1月にかけて京都大学に留学したのですが、そこで、私は京都大学の教育の質に感銘を受け、交換留学プログラム終了後に、2つ目の修士号を取得するために京都大学へ再び留学することを検討し始めました。

また、日本の四季（特に春の桜や秋の紅葉）を経験したいとも考えていました。

4.母国と日本の違いは、何ですか？

インドネシアでは、履修する科目や出席するクラスがあらかじめ決められています。京都大学では、興味のある科目に出席したり他の人の意見を参考に科目を選択したりすることができます。指導教員の先生からも経済学や経営学分野だけではなく、幅広い知識を習得するよう指導いただいています。私は京都大学の“自由の学風”に満足しています。

5.日本での生活で困ったことはありますか？

交通手段です。

インドネシアではバイクが一般的な交通手段なのですが、私は日本の運転免許証を習得していないので、徒歩や特に自動車で移動しています。

健康的といえ、そうなのですが、

京都大学の宿舎は山沿いにあるため、特に冬の自転車での通学は大変でした。

また、日本人はとても静かなので、音が鳴った時に周囲の人々に注目されないようにスマートフォンは常にサイレントモードにしています。

それから、食べ物に関しても苦労しました。

以前よりもハラルの食物を提供している店の数は増えたと思いますが、種類が限られています。

6-1 京都留学生ショートムービーコンテストに応募したきっかけは何ですか。

このコンテストは、京都での留学生活について、多くの人に発信する事のできるととても良い機会だと思ったからです。

コンテストを主催している留学生スタディ京都ネットワーク STUDY KYOTO

(<https://www.studykyoto.jp/ja/>) は、有益な情報を発信してくれると留学生の中で広く知られているため、私は来日してすぐに STUDY KYOTO の WEB サイトでこのコンテストのことを知りました。応募したのは、京都での日々の暮らしの写真を撮って、母国の家族や友達に SNS を通して発信していくことが私の趣味ということもあり、京都に来てから修士課程修了までに撮った写真を使って自分の留学生生活をまとめる良い機会だと思ったからです。

6-2. 応募者に何かアドバイスはありますか。

留学生活での経験を素直に表現してみてください。

私自身の考えですが、審査員の方々は、私たちが京都での生活をどう感じているかを動画で表現することを期待しているのだと思います。

カメラを持っていなくてもあきらめないでください。私はスマートフォンで撮影した写真や動画を編集して作品を作りました。



7-1.どのように家族としての（父親としての）生活と研究を両立されているのでしょうか。

時々両立が難しく、ストレスに感じることがあります。

私が修士論文を書いたとき、息子は生後わずか3か月でしたし、データ収集のために1か月間インドネシアに行かなくてはならない時もありました。

大変なこともあります、家族がいなければ、私の人生は寂しいものになるでしょう。

ですから、家庭とのバランスを取る方法を身につけるしかないのです。

7-2.自宅で研究をしているのですか。

自宅で研究をしようとしても、子どもたちがさせてくれません。コンピューターを開くたびに子どもたちがそれで遊ぼうとするのです。

8-1.家族とどのように過ごしていますか？

週末には、子どもたちや友達のためにインドネシア料理を作ることもあります。

8-2.家族で出かけるお気に入りの場所がありますか。

鴨川です。

鴨川は京都大学の学生にとって特別な場所と言ってもいいでしょう。

研究の時の息抜きや、リフレッシュするときにコーヒーを購入して鴨川へ行きます。

美術館や水族館もお気に入りの場所です。他には、友達が訪ねてきたときは金閣寺を訪れます。

9.新型コロナウイルス（COVID-19）のパンデミックによる学生生活の変化について教えてください。

正直なところ、良いことは思いつきません。幸い私はすべての要卒単位を取得済だったため、それほど頻繁にオンライン授業に参加する必要がなかったのですが、オンライン授業に関しては、パソコン画面を見つめながらクラスメートと話すことに時々違和感を覚えます。

昨年、母国でのフィールドワークをキャンセルしなければならなかったことは、私にとって大きな失望でした。キャンセル後約3ヶ月間、実りのある研究活動を行うことができませんでした。指導教員の先生のアドバイスで、オンラインにて研究活動を行うことになり、そのおかげで、必要な資料とデータを収集できました。この新型コロナウイルス（COVID-19）のパンデミックが私たちの課外活動にも悪影響を及ぼしていることは誰もが納得すると思います。

研究活動だけでなく、私がかつて会長を務めた“京都・滋賀インドネシア留学生会”もパンデミックの影響を受けました。以前は、定期的に会合や集会を開いて一緒に食事や、他のメンバーと情報を交換したりしていましたが、パンデミックの間に直接会うことはありませんでした。私たちのような大規模なコミュニティでは、オンラインイベントだけでは十分ではないのです（※）。

（※）2021年5月現在、インドネシアからの留学生数は、中国、韓国に次いで3番目に多く、116名が本学に在籍しています。

参考：Kyoto University “Facts and Figures” <https://www.kyoto-u.ac.jp/explore/en/data/>

10.ステイホーム期間中、どのように過ごしましたか？

私の娘の学校もほぼ2か月間休校になりました。

家に小さな子供がいると、それがどれほど難しい状況か想像できると思います。

そのような環境の中で、私にできる研究活動は読書だけでした。

それでも、指導教員の先生が私をオンラインでサポートし、指導し続けてくれたことは非常に励みになりました。

11.キャンパスのお気に入りの場所はどこですか。

附属図書館が一番気に入っています。 スマートフォンを研究室に置いたまま、本だけを図書館に持っていきます。

そうすれば、私が図書館にいる間、誰も私を邪魔することはできません。

さらに、メディア・commons、共同研究室、OSL、ラーニング・commonsなどの施設は、研究活動に不可欠です。

パンデミックが発生する前は、ラーニング・commonsを使用してプレゼンテーションの練習をしていました。

図書館を上手に活用することは、学生生活をより実りの多いものにするために不可欠です。

京都大学附属図書館 (<https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/mainlib/>)

12.京都大学修了後の計画を教えてくださいませんか？

東南アジアの大学で教えることが選択肢の1つにあります。

日本で働くなら、関西圏を離れたくないと思っています。

13.新しく入学した留学生にアドバイスをお願いします。

文句を言うのではなくて、良い面と悪い面を柔軟に受け入れることが必要です。

日本の科学技術が進んでいると思っているなら、少し驚かれるかもしれませんよ。

支払いシステムは1つの良い例です。

京都にはまだまだ発展の余地があります。

パンデミック以降、支払いシステムは改善されてきましたが、以前は現金しか受け入れられなかったカフェやレストランがたくさんありました。



「きずな」チューターより「インタビューを終えて」

“あやみ”さん

Eko Heru さんの日本での色々な経験のお話を聞かせていただいて、共感できることも、新しいこともたくさんあり、とても楽しい時間でした。

“たまみ”さん

Eko Heru さんは非常に話しやすい方で、インタビューの時間はあっという間に過ぎました。

どんな状況でも研究活動続ける様子に刺激を受けました。

私もたまにはスマホを研究室に置いて、図書館で作業してみようと思います。

